2016年
10月24日
月曜日

「赦し」の意味

舟木　譲　教授（キリスト教学・宗教哲学）

キリスト教が伝える人間が心得るべき事柄として代表的なものに「隣人愛」がある。「自らが、困っている人の隣人となりなさい」あるいは「隣人を自らのように愛しなさい」と説かれたイエスの教えによるものであるが、この教えと双璧をなすものが「愛敵」とよばれるものである。こちらも「隣人愛」同様「自らの敵をも愛しなさい」というイエスの言葉に由来するものであるが、「隣人愛」に比べてこちらの実践はよりハードルが高いのではないだろうか。困っている人の傍らに立ち、その人のために何らかの行動を起こす、というのは「他人の役に立っている」という実感や相手から感謝されるという間接的な「見返り」もあり、自らの決断と行動力で実践可能な教えと一見考えられる。しかし、自らに不利益を与え、あるいは攻撃的で時として存在を脅かされる相手を「愛する」と言うのは、あまりに理不尽な教えと言えないだろうか。しかし、「隣人愛」の場合も、その対象をイエスが限定している訳ではないので、「自らの敵」も含めて「自らのように愛する」ことが本来は要求されているのである。このように考えるとイエスの要求に我々が応えることは不可能であると結論付けたくなり、キリスト教が理想とする生き方はあくまで理想として、あるいはそうできれば良い、という観念的な目標であると絶望的な気持ちに襲われてしまう。

ただここで、改めてイエスが語る「自らの敵」について考えてみるとき、それは観念的な存在ではなく、自らと同様、平安や幸福を希求し、喜びや悲しみを感じる「ひと」であることに思い至る。ある他者を「自らの敵」と判断する時、我々は相手のことを理解し、また共感するという本来、社会的存在である私たちが最も尊重し努力すべき事柄を放棄し、極めて乱暴な生き方になってしまうのである。

このことをさらに掘り下げた時、もう一つのイエスの教えが「愛敵」を可能とするための大きな示唆を与えてくれる。それは「赦し」に対するイエスの見解である。イエスは自らの筆頭弟子であるペトロが「自らに罪を犯したものを何回赦せばよいでしょうか」と問うた時、「7の70倍」赦すように説いている。「7」というキリスト教にとって「完全」を象徴する数の70倍ということは、「赦し」は無制限になされるべきであるということになる。これもまた実践不可能な印象を与える教えであるが、このことの理解のために、イエスは、「王によって到底返済不能な莫大な借金を棒引きしてもらった家来が、それにもかかわらず自らに借金のある友人へ厳しく返済を迫った結果、王の怒りを買い投獄される」というたとえ話をされている。ここには、私と言う存在が多くの関係性の中で、「赦し・赦されている」という端的な事実の上にあり、そのことへの想像力を欠いた時、如何に滑稽で愚かな生き方へと転落してしまうのか、という私たちの真実が明らかにされている。

「赦し」を放棄したとき、私たちの社会がいかに残酷で、自らをも傷つける社会へと変貌していくのかということに思いを馳せ、自らの課題として向き合うための想像力の翼を可能な限り広げることが、今、喫緊の課題として私たちの眼前に迫っているのではないだろうか。■